
サツマイモ資料館長の日記より (2)

井 上 浩

プエブラのカモテ (1992年 8 月20日)

サツマイモの原産地はメキシコからコロンビア、ベネズエラなどへかけての広い地域とされている。

いつかそこへ行ってみたいというのがわたしの願いだが、日本では向うの事情がなかなか分からない。そう思い込んでいたら、身近かにメキシコ通のすばらしい人がいた。

1986年から89年までの3年間、メキシコ市にある日墨学院 (リセオ・メヒカート・ハポネース) の先生をしていて、今は川越の小学校に勤めている矢島隆夫先生 (45) がその人だ。

その矢島先生がこの夏休みにメキシコへ遊びに行かれると聞いていたので、あらかじめ頼んでおいた。

「メキシコはサツマイモの原産地の一部ということになっています。とくにメキシコ市の南にあるプエブラはサツマイモの町として知られているようなので、できたら見て来て頂けないでしょうか。

野菜類のルーツ探りで有名な池部誠氏の『中米野菜探険隊』(『週刊文春』昭和61年3月20日号) にも、『プエブラのイモ野郎』として出てきます」

先生はそれまでサツマイモにはあまり関心がなかったようだが、わたしの頼みを聞くとわざわざプエブラまで行き、いろいろ当ててみたという。そしてこんなみやげ話をして下さった。

「昨日、無事帰ってきました。館長さんに頼

まれたんで1日つぶしてプエブラへ行ってきましたよ。

メキシコでサツマイモといえばあそこしかないようでしたから。そう、行ってみて分かったんですが日本の川越みたいな所でした。

プエブラはメキシコ市からかなり南へ下った所にある高原の町です。ここで面白いのは町の入り口にサツマイモで作ったお菓子入りの小箱を持った売り子が大勢たむろしていることです。

そして乗用車やバスが入ってくると、ワッと取り囲み、『カモテ、カモテ』と売りつけます。『カモテ (CAMOTE) 』とはサツマイモのこと。わたしも1箱買わされましたが、それで旅行者は「ああ、プエブラに来たんだな」と思うようです。メキシコでイモ菓子を売りつける町なんて、ほかにはありませんからね。

しかも町の中に入ると、さっき町の入り口で買わされたのと同じイモ菓子を売っている店がずらっと並んでいる所があるんです。明るく堂々とした大きな店ばかりで、10数軒はあるでしょう。その看板はどれも『カモテリア (CAMOTERIA) 』。つまり『イモ菓子の店』です。

その中の一軒に入り、イモ菓子の作り方も聞いてきましたよ。プエブラのイモ菓子は2種類あるようです。

一つは煮て裏ごししたサツマイモに、果汁と砂糖を入れ、ちょうど葉巻のような形に固めただけのシンプルなもの。

果汁はレモンかイチゴ。レモン入りは黄色で、イチゴ入りは美しいピンク。日本でもレモンはサツマイモに合うとしています、イチゴを使うとは面白いでしょう？

もう一つは、手の混んだ派手なもの。裏ごししたサツマイモに砂糖と食紅を入れ、カマボコ型に固めます。その表面に赤や白、青、黄などのドロドロの砂糖でメキシコ独特の模様を筒描きしたもの。生地がピンクですから、そのデコレーションが映え、食べてしまうのがもったいないような感じです」

矢島先生は話だけでなく、それらの珍しいイモ菓子を持ってきて下さり、こんな感想をもらされた。

「埼玉はメキシコと姉妹関係を結んでいるのでしょ。その上、埼玉の川越もメキシコのプエブラもイモの町として有名じゃあないですか。

だからお互いに姉妹都市になったらいいと思うんですがどうでしょう。向うのイモ菓子屋の主人にそう言ったら、『それはすばらしいことだ、大賛成だ』といっていましたよ」

山西省農業科学院からの研修団（9月11日）

中国の山西省は埼玉県と姉妹関係にあるので、交流が盛んだ。その山西省農業科学院の研究員、5名が来てくれた。一行は鶴ヶ島市にある埼玉県農業大学校で研修中。6か月の予定でちょうど半分の3か月がたったところという。ところがだれも日本語がペラペラなのにはびっくりした。

今日は時折行なわれる校外学習日で、引率指導者は埼玉県園芸試験場鶴ヶ島洪積畑支場の野口篤氏。

午前中は川越イモの本場、三芳町上富の阿

部家に行ったという。同家では機械メーカーと組んで、サツマ苗の機械挿しを実験中だが、今の所は順調のようという。

当館には午後1時頃着き、資料展示室と全国から集めたサツマイモ製品の展示即売場をゆっくり見てくれた。

そのあと事務室で2時間もいろいろ話し合ったが、サツマイモ関係ではこんな話が出た。

「中国でサツマイモと言えば山東省。あそこは人口の多い所で1億人近くいる。

山西省は3000万人。山西省の重要作物は、小麦、トウモロコシ、モロコシ、イモ類の順。

イモ類ではジャガイモ、サツマイモ、ヤマトイモの順。ジャガイモの方がサツマイモよりやや多い。ヤマトイモはいくらもない。

サツマイモを今でも食べているかって？

農家では毎日食べている家が多い。でも都会では食べない。市場へ行って、お金を出して買って食べるほどのものではないから。

山西省農業科学院は太原市にある。太原の自由市場では、1キログラム、ジャガイモが0.5元。サツマイモは0.6元。サツマイモの方がちょっと高い。

今1元は日本円で25円。だからサツマイモ1キログラムは日本円で15円。

焼き芋屋？

ある、ある、いくらでもある。自由市場に行ってごらん、1年中出ている。ただ夏は少ない。多いのは新イモの取れる9月から。そして夏の前の5月まで。

値段？ 高いよ。1キログラム、3-4元もする。でもおいしいから、つい買っちゃう。

焼き芋屋は朝は遅い。その代り、夜は10時頃までやっている。

家庭のサツマイモ料理？ 煮て醤油などで

味を付ける。油で揚げる。それと大学イモ」
帰りに色紙になにか書いて欲しいと頼むと、
呂慧卿団長が大きく「日中友好 天地永久」
と書き、その下に一人ずつ署名してくれた。

ジャイカからの女性研修団（10月9日）

わが国の国際協力事業団（JICA）、東京国際研修センターの「農家生活水準コース」に在籍、研修中の女性だけの一団が来てくれた。

彼女たちはアジア、アフリカ、中南米などの国々の農業関係の役所のエリート。今日の研修テーマは、わたしのもっとも得意とする「川越イモの歴史と現状」だったので、2時間、熱弁を振った。

そのあと資料館の日当りのいい芝生に椅子を並べ、各国のイモ話を披露してもらった。以下がそれで、発言順。

タラットさん（パキスタン。北西辺境農業省農事担当官。42歳）

「世界唯一のサツマイモ資料館のオーナーがサツマイモ・レストランとは驚いた。

パキスタンにはサツマイモ・レストランはない。

サツマイモは家庭で料理して食べるもの。一番ポピュラーな食べ方は、ローストしてトウガラシと塩をつけて食べる。それにレモンを添える人もいる」

サヴィタさん（インド。農業省技術補佐官。39歳）

「インドには10日間ほど、穀物を一切食べてはならない時期がある。そう、穀物の断食。その時、サツマイモをたくさん食べる。

料理もいろいろある。手の混んだものもあるし、サツマイモのお粥のようなかんたんなものもある」

リンさん（パプア・ニューギニア。地方ガールスカウト養成官。22歳）

「サツマイモの本場のような所。種類も多く、たくさん食べる。

料理もいろいろあるが、一番ポピュラーなものといえはこんなもの。

イモの皮をむいてコロに切り、ゆでる。火が通ったらココナッツミルクを入れて煮込む」

レーニさん（インドネシア。農産物供給計画課上級職員。30歳）

「新しい料理法がないので、今開発しているところ。

その一つに、料理用のバナナとサツマイモを輪切りにして、一緒にココナッツミルクと煮込むものがある。味付けは塩と砂糖」

イルマさん（メキシコ。農業日傭い労働者連帯プログラム担当官。30歳）

「この資料館のサツマイモ・マップにもあった通り、メキシコ南部はサツマイモの原産地に入っている。

でもメキシコ人はサツマイモを重く見ていない。あれを大事にしているのはプエブラとその周辺の人ぐらい。そこではよくブタ肉と一緒に煮込んでいる。『肉ジャガ』のようなもの。プエブラのサツマイモ資料は帰国したら送ってあげましょう」

ウォンさん（中国。寧波科学技術委員会。29歳）

「サツマイモというと、とっても安いものという感じがする。

都会には焼き芋屋が多い。上海には特に多い」

ゼイナブさん（エジプト。農業省野菜園芸局専門員。40歳）

「エジプトにも焼き芋屋がある。サツマイモ

は安い、価値のあるものだ」

なおこの研修申し込みは、川越農業改良普

及所を通してあり、同所の酒井ミツさんに、いろいろお世話になった。

ポテトジョーク アラカルト

◎消費

ふとった経済学者が、教職員専用の食堂で食事をしていた。彼が2つ目のパイに手をのばすのを見ていたダイエットの専門家が、その愚行の理由を教授に説いて聞かせようとした。そこで経済学者は反論した。

「あなたも御存知と思いますが、平均的アメリカ人は生涯に鶏卵3万個を食べ、パンを6千本、ジャガイモを9千ポンド、牛肉を8千ポンド、羊を15頭、豚を17頭、仔牛を6頭、砂糖数百ポンド消費します。パイをひと切れ余計に食べたからどうだって言うんです？」

◎なぜぞ

ゴルバチョフの時代も、エリツィンの時代も、ずっとモスクワで流行っているなぜぞ。

「長さが百五十メートルあって、普段はジャガイモを食べているものは何でしょうか？」

「肉を買うのにできるモスクワの行列」

◎高級料理店

ある高級レストランの気取ったウエイターが「わたくしどものステーキをどう御覧になりましたか？」と食事を終えた客にたずねた。「確かに見ましたよ」と客は言った。「ジャガイモの陰にあったけど」

◎自分で

「どう、あなた。このポテト・サラダ」と新妻が夫にたずねた。

「おいしいよ、とっても。これ、君、自分で買ってきたの？」

◎ジャガイモは大切な食糧

ドイツの農民指導者ヴァルター・ダレ(1933年ヒットラー肉閣の食糧相)が、ある村の鶏小屋を抜打ち的に調査した。

「鶏にどんな餌をやっとるか」

とダレは最初の農民に質問した。

「もちろん、良い卵を生むように穀物をやっています」

「それは食糧の浪費だ」

その農民は逮捕された。

第2の農民にも、同じ質問をした。

「ジャガイモを与えております」

「それは、貴重な国民食糧の許し難い浪費だ」その農民は罰金刑にされた。

3番目の農民は、同じ質問にこう答えた。

「ああ、あっしですか。私は毎朝鶏小屋に1マルクはうりこんで、『自分で餌を買え』って言ってやります」

◎ジャガイモの生産と消費

資本主義体制下では、生産には厳格な規格があり、消費はめちゃくちゃに混乱している。共産主義体制下では、消費には厳格な規律があり、生産はめちゃくちゃに混乱している。

◎江戸小話

「芋屋の娘、歳をとったね」

「ああ、ふけた」

◎譲り合い

あるレストランで二人の子供がベークド・ポテトを注文した。やがて料理が目の前にきたが、大きさに差があった。めずらしく、「お前、先にとって」「いや、君が先にとっていいよ」と先を譲りあった。5分ほど譲り合っていたが、一人が「それなら、こっちを食べるよ」と大きいほうを取ってしまった。もう一人は仕方なく小さな芋をとったが、「もし僕が先取るなら、絶対小さなのを取ったのに」

と悔しそうに言った。

そこで、大きいほうをとった子が、素知らぬ顔でつぶやきました。

「先を取っても、後を取っても、君は小さいものになるのだから結果は同じことだよ」

◎ジャンボ・ポテト

ある町のジャガイモ祭りの話。

適当なサイズのいもが展示され、説明には『日本一のジャンボ・ポテト』とあった。

町の人「それほど大きくないじゃないの」

農民「ジャンボ・ポテトの肥大途中のときのものでして」 (浅間 和夫)